

カオス

2006(平成18)年10月31日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督・脚本＝トニー・ギグリオ／出演＝ウェズリー・スナイプス／ジェイソン・ステイサム／ライアン・フィリップ／ジャスティン・ワデル／ヘンリー・ツェーニー／デモン・ジョーンソン／ニコラス・リー／ジョン・カッシーニ／ポール・ペリ（アートポート配給／2005年アメリカ映画／107分）

……『トランスポーター』でおなじみのジェイソン・ステイサムと若手イケメン俳優のライアン・フィリップが刑事として大活躍。カオス（混沌）と「カオス理論」を真正面に据え、銀行団 VS シアトル市警との対決を描くものだが、タイトルどおりストーリーは混沌としているうえ二転三転。そして、一件落着と思えた後、さらにあっと驚く予測できない結末が……。こんな映画は詳しい説明は不要。あなた自身がしっかりとスクリーンを注視すると共に、セリフにも十分集中を……。

シンプルなタイトルは意味シン……

この映画のタイトル『カオス』とは、ギリシャ語で「混沌」や「無秩序」を表す言葉。そしてプレスシートをそのまま引用すれば、「カオス理論とは、決定的な運動法則があっても初期データには必ず誤差があり、そのわずかな誤差は運動の中で増幅され非常に複雑で不規則かつ不安定な振る舞いを起こす。その結果、将来における状態が予測不可能になる」と言うもの。

そんな言葉をストレートにタイトルとただけに、この映画は派手な銀行爆破やカーチェイスの迫力の他、刑事と強盗グループとの駆け引きや対決、シアトル市警内部の上司、同僚、男女間の微妙な人間関係、そして前半の主人公クエンティン・コナーズ刑事（ジェイソン・ステイサム）の活躍、後半の主人公シェーン・デッカー刑事（ライアン・フィリップ）の活躍を描いていく中、最後にはア

ッと驚くカオス理論の完結へ……？

したがって、その意味シなタイトルの意味を十分かみしめながら、スクリーンを注視することが大切……。

この映画の主人公は……？

この映画の主人公は、『トランスポーター』(02年)、『トランスポーター2』(05年)での主演や『ミニミニ大作戦』(03年)、『セルラー』(04年)での活躍が目立つ、ジェイスン・ステイサム演ずるコナーズ刑事。彼は誰からも信頼されている優秀な刑事だが、かつてパール橋まで犯人を追い詰めながら、相棒のヨーク刑事が人質を射殺してしまったため、謹慎処分となっていた。そんなコナーズが銀行強盗団のボスから交渉人として指名されたのが『カオス』の出発点。

新たな相棒として組んだ新人のデッカーと共に現場に臨み、待機を命じたコナーズだったが、SWAT チームが強引に銀行内に突入したため、銀行は爆破され、結局犯人たちはその混乱に紛れて逃げてしまうことに……。そこで不思議だったのは、銀行内の金庫が爆破されたにもかかわらず、現金が盗まれていなかったこと。さらに、テープに残されていた犯人の声を分析すると、「混沌<カオス>の中にも秩序はある……」という強盗団のボスからの謎めいた言葉が……。さあ、これからどんなカオス理論が展開していくのだろうか……？

警察内部の面白い人間関係に注目！

この映画が面白いのは、警察内部の生々しい人間関係が描かれていること。その第1は、主人公のコナーズの新たな相棒となった新人刑事デッカーの「出来」をめぐるさまざまなやりとり。デッカーの父親が有名な刑事であったこと、デッカーがまがりなりにも大学出であること、意外にしぶというえ、コナーズがビックリするほどの「臨機応変」性と「状況対応」能力を備えていること等が次第に明らかになり、コナーズの「死亡」後はデッカーが主演の座に……。

第2は、コナーズの有能ぶりを嫉妬する上司のマーティン・ジェンキンス警部(ヘンリー・ツェーニー)のキャラ。コナーズのかつての恋人であったテイラー・ギャロウエー刑事(ジャスティン・ワデル)は、今ビンセント・デュラーノ

刑事(ニコラス・リー)を相棒として、コナーズ、デッカーらと共に捜査に従事しているが、このテディーは今では上司のジェンキンスとつき合っているから、その点ではジェンキンスは優位にあるはず……。ところが、人間の嫉妬心はそれでも満足できないものらしい……。したがって、犯人逮捕という目的に組織として向かい合いつながりながらも、ジェンキンスの指示は少し主観的……。そんなところが面白い……？

第3は、「パール橋事件」についてコナーズに不利な証言をしたことで他の同僚たちから嫌われているバーニー・カーロ刑事(ジョン・カッシーニ)のキャラ。

第4は、証拠保管室の守衛のハリー・ヒューム(ポール・ペリ)のキャラ。そして第5は、コンピューターやメカに詳しい捜査官のブランドン・デックス(デイモン・ジョンソン)のキャラ。

彼らは事件の真相解明においてそれぞれ大きな役割を果たすからそれに注目しなければならないが、それぞれの行動の動機が人間本来の「欲」だけではなく、警察組織内の人間関係にあるところが面白い……？

強盗団のボスは……？

強盗団のボス、ローレンツを演じるウェズリー・スナイプスは『ブレイド』(98年)、『ブレイド2』(02年)、『ブレイド3』(04年)で有名な黒人俳優だから、当然ライアン・フィリップよりも格上で、本来ジェイソン・ステイサムと並ぶランクのはず。ところがこの映画では、主役をジェイソン・ステイサムとライアン・フィリップに譲り、自分は一步退いた役柄に……。しかし出番こそ少ないものの、コナーズ刑事とデッカー刑事を翻弄する知的で不気味な役柄をウェズリー・スナイプスはかなりユニークな服装で見事に演じているから、それにも注目を……。

ローレンツはなぜ謹慎中のコナーズを交渉役に指名したのか？ そしてローレンツの追及はなぜいつももう一步のところで失敗するのか？ そしてなぜコナーズの考えることがローレンツに先に読まれているのか……？ それがこの映画の謎を解く1つの大きなテーマ……。

コナーズの死亡は……？ その後のデッカーの大活躍は……？

ローレンツ逮捕の輪は徐々に狭まり、コナーズとデッカー、テディーとビンセ

ントらは、その逮捕に向けて万全の体制を敷いていた。ところが張込み中、突然テディーの携帯が鳴り始めるという初歩的なミスによって、その計画にほころびが生じたうえ、乗り込んでいった建物内での銃撃戦のさなか建物自体が爆破されることに……。

そのため、デッカー、テディー、ビンセントは間一髪逃げ出したものの、コナーズは爆発の中であっけなく死亡……？ 翌朝、焼け跡でコナーズの警察章が発見され、担架で運ばれてくる死体の前で、デッカーたちは復讐を誓ったが……。もっとも、コナーズの死体は袋の中に入っていたので、これはちょっと怪しいぞと多くの観客は思ったはずだが……？

コナーズ死亡の後はデッカーの独壇場。新米刑事ながら直感の冴え、推理の論理性はお見事で、ハリーをやりこめて秘密を暴き出したり、パソコンに詳しいブランドンの協力を得たりする中、今デッカーはローレンツと対決するところまでローレンツを追い詰めることに成功……。圧倒的にローレンツの方が優位にある状況だが、若さと気力でデッカーがどこまで対抗できるだろうか……？

アッと驚くドンデン返しが……

刑事モノ、サスペンスモノは多くの伏線が敷かれ、ストーリーが二転三転そして四転五転するものほど面白いのは当然。その最高傑作が『ワイルドシングス』（98年）だった。この映画はタイトルを『カオス』としたぐらいだから、単純なストーリーだと「看板に偽りあり」となってしまうので、とことん混乱させ、無秩序状態にさせてしまうはず。そう思っていたのに、途中でコナーズが死んでしまったうえ、その後のデッカーの大活躍の中、苦勞の末にやっとローレンツを射殺、これにて一件着落……。ホントにこれで終わりかな、と思っていると……？

さあ、ここからがこの映画のホントの面白さ……。アッと驚くドンデン返しにはあなたもきっとビックリするはず……。その1つは多分あなたも予想しているどおり、実はコナーズは死亡していなかったというドンデン返し。しかも、もう1つは……？ それを言っちゃおしまいだから、それはあなた自身の目で……。

2006（平成18）年11月4日記